

Title	「日本社会学会」の設立とその後の経緯
Sub Title	The establishment of the Japan sociological society and its later course
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1988
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.61, No.5 (1988. 5) ,p.163- 192
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	法学部政治学科開設九十周年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19880528-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「日本社会学会」の設立とその後の経緯

川 合 隆 男

- 一、はじめに
- 二、「日本社会学会」の設立
- 三、「日本社会学会」の機関雑誌の変転、研究報告会（社会学会大会、「階級」論の特徴
- 四、むすび

一、はじめに

戦後日本における社会学の展開は、その理論的展開や経験的実証的研究において多くの秀れた研究を生みだし、極めて目覚ましいものがある。研究分野も勢い専門・個別分化し、数多くの新しい研究分野をもきりひらき、隆盛を迎えるに至ったといえるだろう。しかしながら、他方では、今日ではいくつもの理論的パスベクトイブ自体がますます競合複合しつつも問題関心や理論的関心がますます個々に分極細分化され、多くの経験的な実証研究が実施され調査結果が刊行されつつも他の研究や理論的研究との関連が十分に深められないままに終始し、更に、さまざまな研究

分野の分散に自らの研究関心を相互に位置づける作業も容易ではなく、激変する社会変動を前に、自らの準拠枠や殻の中に専ら閉じ込めがちになるのもひとつの現状ではなからうか。

その意味では、自らが関心を寄せる問題関心や研究分野の歴史的な足跡を戦後日本社会学四〇年の歩みや近代日本社会学の歩みとともに再考察する試みは、われわれにとって重要な作業のひとつであると考えられる。しかも、国際的な社会学の動向、単に西欧諸国の社会学の動向だけでなく、アジアその他の非西欧諸国の社会学の動向とも積極的に関連づけて再考察してみることも必要であろう。

本稿では、近代日本社会学の歩みについて、特に、「日本社会学院」のあとに設立され、今日の社会学会に連らなる「日本社会学会」の設立とその主な足跡について批判的に再検討しようとするものである。⁽¹⁾ わたし自身の主たる研究関心は社会成層・階級・階層に向けられているが、現在の研究動向としては、機能主義的階層論とマルクス主義的階級論が著しく分極して研究が進められている。一九二五年（大正一四年）十一月の「日本社会学会」の第一回研究報告会の共通テーマはまさに「階級」論であったが、この「日本社会学会」で「階級」論がいったいどのように論じられ展開されていったのか、というのがここでのわたしのもうひとつの関心である。

日本社会学史についての研究は、「日本社会学史学会」の創立（一九六〇年）にも示されてきた如く、従来精力的に進められてきた領域のひとつである。⁽²⁾ しかし、そうした研究蓄積に対して、いくつかの疑問点、問題点を抱かないわけではない。学史研究においても特定の「もの見方」やパースペクティブのなかだけで研究が進められ易く、研究視点や分析枠組が固定化され易い。社会科学、社会学の生成、形成の歴史的・文化的・社会的背景との関連や近代日本の展開過程における多様な社会像・国家像・生活像とのかかわりが十分に深められた研究は比較的少ない。近代日本における社会観察・社会調査の展開、その系譜との関連で社会科学や社会学の展開を跡づける視点を基本的に欠いていること、また特に近代日本の社会学の形成を担った人々の思想形成や生活史を踏まえた考察など、が必ずしも充

分でなかったのではないかといった諸点が指摘されるだろう。

社会学史の研究を進めていくうえで、一般的に次のような論点およびアプローチの仕方を設定することが可能である。

- (i) 社会思想ないし社会学思想、社会学説、社会学上の理論的パースペクティブ（あるいはパラダイム、モデル）の展開を基本的な論点として社会学史を検討するもの⁽³⁾。
 - (ii) 社会問題、社会観察、社会学理論・社会学理論の相互の媒介的な関連に基本的な焦点をあてて社会学史を考察しようとするもの。
 - (iii) 理論社会学、家族・農村・都市・地域・宗教・労働・産業・政治社会学、階級・階層論、社会意識論・マス・コミュニケーション論、社会問題、社会福祉などのように社会学の個別専門領域、あるいは専門分化過程を対象にして社会学史を構成しようとするもの。
 - (iv) 社会学を中心とした学問活動の組織化および制度化（非制度化（institutionalization, or deinstitutionalization）に基本的な焦点をあてて研究しようとするもの。個人あるいは集団・組織の学問活動にとって、学会という組織化、制度化がどのようなかわり、役割を果たしたのか、学問活動をどのように促し、制約していったのか。
 - (v) 社会学の学問活動を担った人々、学者、研究者などの生活史（life history）との関連に重点をおきつつ社会学史の展開を跡づけようとするもの⁽⁴⁾。
 - (vi) 社会学の歴史的展開をとらえる時間軸と空間軸についてのアプローチ。これは、(i)～(v)の論点のすべてにかかわる問題である。それらの異時的展開（過去から現在への経緯、過去への遡及）と共時的展開についての関心である。そして、しばしば異時的展開に重点をおいて一国（国別）社会学史として跡づけられる場合が多い。
- (i)～(vi)を各々相互に関連づけて展開することは当然可能である。ここでは、特に(iv)の制度化に焦点をあてる。わが

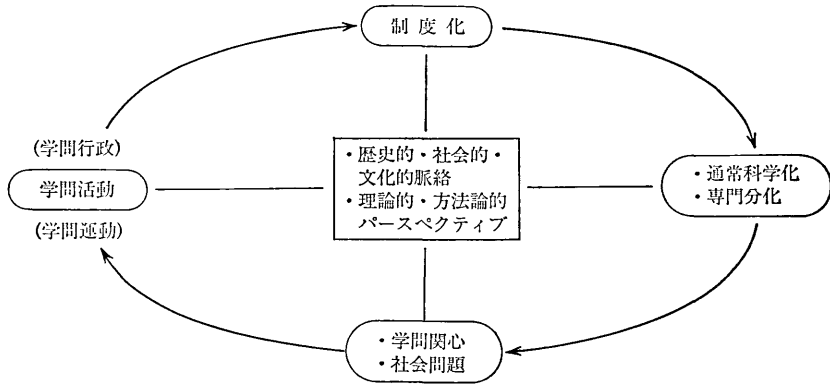
国ではこれまで相對してとりあげられることの少なかつた「日本社会学会」の設立の如く、学問活動の組織化、制度化、そしてそれを担った人々、更に理論的構築とすることによる自己拘束性、歴史的社会的状況といった論点と視点から、「日本社会学会」の設立とその後の経緯について考察したい。

二、「日本社会学会」の設立

近代日本の社会学史研究のなかでは、学問活動としての社会学界の動きについて学、活動に焦点をあてて考察するという試みはこれまで殆んどなかつた。⁽⁵⁾そこで、本稿では先の学史研究の論点のうち特に④学問活動の組織化、制度化の側面に焦点をあてて「日本社会学会」の辿った足跡の諸特徴およびその制度的枠組のもとで展開された「階級」論の特徴を再検討してみたい。

(一)学問活動の制度化と専門分化 近代日本において主要な学会組織の創立年度をみてみると、理学・工学・農学・医学等の自然科学の諸学会の創立はすでに一八七七年（明治一〇年）頃から始まっているが、文科系では一八八四年（明治一七年）の哲学会、一八八七年（明治二〇年）の国家学会、一八八九年（明治二二年）の史学会、社会政策学会は一八九七—一九二四年（明治三〇—大正十三年）などのように学会組織としては相對してやや遅く出発している。近代社会における科学の成立過程や国民国家体制を急速に確立するという国家的要請のもとで、技術志向・政策志向を中心官学を軸にした学会設立の動きとして展開したとみるべきであろう。社会学会の動きについていえば、「社会学会」⁽⁶⁾（一八九六—一八九八年）（明治二九—三一年）、「社会学研究会」⁽⁷⁾（一八九八—一九〇三年）（明治三一—三六年）、「日本社会学院」⁽⁸⁾（一九三一—一九三三年）（大正二—十二年）、そして「日本社会学会」の出発点となっている学会の創立（一九二四年）⁽⁹⁾（大正十三年）と展開されていった。日本社会学会の展開も近代日本での諸学会の活動にみる基本的特徴をあわせもつ

図 1 学問活動の制度化と専門分化



ものといえるだろう。

学問活動の組織化、制度化は、それぞれの社会の歴史的脈絡のもとで、多様な問題関心、そして現実的要請や社会問題の出現を前に、多くの場合特定の支配的な理論的・方法論的パースペクティブを軸にして繰り広げられていく学問活動の組織化、制度化を意味している。そして、ひとたび制度化されると、その学問活動はそうした制度的枠組のもとで進行し通常科学化し、そのもとでますます専門分化し問題関心や理論的関心もその制度化を支えている特定化された支配的な理論的・方法論的パースペクティブに拘束されていくことが多い。そのことが、社会変動にもなう社会問題の深化や新たな社会問題に対応しきれない事態を招いていく場合も多い。その結果として、また新たな学問運動・学問活動・学問行政を必要としていく。だが、そのような運動・活動・行政が必ずしも組織化され制度化されていくとは限らない。また、学問活動が制度化され、通常科学化・専門分化されつつも、社会学的想像力が乏しく広がり深まっていく問題関心や現実の社会問題に対応しきれずに社会的創造力を困難にしていく、同時に社会生活を支える人々の関心は、そのような学問活動からますます遠のいていく、といった事態も考えられる。このような一連の動きを図化したのが図1である。

学問活動の制度化 (institutionalization) とは、社会学などの学術的・

専門的な学問活動・研究が、大学や学会、その他の機関あるいは集団等を媒介にして一定の団体、組織やコミュニケーション・ネットワークを作り交流を図りながら、ある程度恒常的に、規則的に、正統的に継続され展開されていく過程を意味している。この過程は、それぞれの歴史的脈絡のもとで国々で多様であり、またいくつかの局面あるいは段階を設定することも可能である。近代日本社会学の展開に即して言えば、(i)幕末から明治初期にかけての科学思想、社会思想、社会学思想が渦巻き生成していく時期、(ii)社会学の講義が開始されたり社会学翻訳書や社会学書が出始めた明治一〇年代より、「社会学会」(一八九六—一八九八年)、「社会学研究会」(一八九八—一九〇三年)などが設立された明治三〇年代前半までの動き、(iii)明治三〇年代後半から建部遜吾を中心とする「日本社会学院」(一九一三—一九二三年)が設立され、やがて解消されていく過程、そして(iv)それ以後の「日本社会学会」(The Japan Sociological Society)設立とそれ以降の動き——これは、十五年戦争期に入るまでの時期とそれ以降の終戦までの時期、更にそれ以後に分ける必要がある——、の歴史的な局面に分けて検討する必要がある。これまでの近代日本の社会学史研究においては、近代日本社会学の成立期をどの時期に求めるかといった研究や思想的・理論的ベースタイプを中心にした研究がなされてきたとしても、制度化過程に焦点をあてて各局面の展開を跡づける試みは極めて少なかった。従って、ここでいう(iv)の局面・段階での「日本社会学会」の設立過程、設立時期そのものについても、ひとつは「大正十二年」設立、もうひとつは「大正十三年」設立、というようにふたつの記述がなされているにもかかわらず、そのことに言及した研究は殆んどないという奇妙な現象が今日まで続けられてきたのである。

(一)「日本社会学会」の設立をめぐる 奇妙であるというのは、「日本社会学会」の設立時期の記述について(i)一九二三年(大正十二年)、(ii)一九二四年(大正十三年)のふたつがなされているにもかかわらず、そのことを顧みず学史研究のうえで検討が加えられていないことである。

(i)「大正十二年創立」とする記述は、まず林恵海「日本社会学の発展」という論稿のなかでみることがができる。

〔日本社会学会〕the Japan Sociological Society. 大正十二年創立。日本社会学院の後を継いで、下出隼吉・藤原勘治・林恵海・松本潤一郎・今井時郎・戸田貞三の諸氏の斡旋によって、大正十二年に設立。当初は理事会が運営に当り、今井時郎東大助教、継いで戸田貞三同教授が常務理事につき、後に会長制をとり、昭和十五年―同二十七年の間は東大の戸田貞三博士・後は林東大教授・白井京大教授・新明東北大教授が会長に就き、現在は蔵内阪大教授が会長。機関雑誌として『社会学雑誌』七七号（大正十三年―昭和五年）・『季刊社会学』一卷四冊（昭和六年―同七年）・『年報社会学』九輯（昭和八年―同十八年）・『社会学研究』五冊（昭和十九年―同二十三年）・『社会学評論』Japanese Sociological Review（昭和二十五年―）等を刊行してゐる⁽⁸⁾とある。「日本社会学会」の大正十二年創立とする記述は、『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』においても、「〔日本社会学会〕the Japan Sociological Society. 大正十二年創立——。日本社会学院の後を継いで、下出隼吉・藤原勘治・林恵海・松本潤一郎・今井時郎・戸田貞三諸氏の本大学社会学科出身者の斡旋によって、大正十二年に設立。事務所を本大学社会学研究室に置く⁽⁹⁾」とあり、以下先に引用したところと同様の文章が続いている。同様の記述を林恵海「社会学」（『日本社会民俗辞典』第二巻所収⁽¹⁰⁾）、福直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』の項目「日本社会学会」⁽¹¹⁾、『講座社会学、別巻』の「年表」⁽¹²⁾などに認めることができる。この記述をみて、もしかして「誤植」ということもあり得ると考えたが、この昭和三〇年前後の時期に一貫して大正十二年創立という記述がなされている。そしてその後の日本社会学史研究書においては、「日本社会学会」創立についてその設立背景については全く言及しないままに、ただ「大正十三年」という記述をしている⁽¹³⁾。しかしながら、終戦前の学史に関する資料や記述では、その設立の経緯とともに大正十三年（五月）の記述が明らかになされてきたのである。

(iii) 大正十三年（五月）創立とする記述は、先の「大正十二年創立」の斡旋者の一人として挙げられていた下出隼吉の『下出隼吉遺稿』のなかにみられる。まず、戸田貞三は次のように言及している。

君が大正十二年東大社会学科の業を終えられた時究も日本社会学界は適當なる指導機關の確立なく頗る渾沌たる情勢を呈して居りました。君は身を挺して此の情勢の匡救に志し着々準備を進められ遂に翌十三年五月我日本社会学会の創立を見るに到りました。是れ全く君の卓抜なる創意と熱烈なる好學心と絶対なる犠牲的精神の発露に外ならないのであります。⁽¹⁴⁾

また、戸田は後に「日本社会学会を中心として」という講演においてもそのなかで「その当時社会学会を作るに就きまして故下出隼吉君などが種々斡旋せられ同学の諸氏の間にも色々意見の交換があつて、震災前から多少芽生えかけていた学会が、いよいよ大正十三年に日本社会学会として成立したのであります」という全く同じ内容の記述をして⁽¹⁵⁾いる。更に戸田貞三は終戦後においても同様の経緯を述べている。

大正二年に、日本社会学院というものが設立されました。これは、それまで、各大学単位にあつて、ばらばらだったものを、全国的にまとめ、学間の交流をはかろうとしたもので、当時非常に意義のあるものだったと思います。……しかし私たちが、ヨーロッパから帰つて来てみると、どうも社会学院の運営の仕方が専制的で、若い連中からいわせると面白くない。もう少しデモクラティックな学会を作ろうではないかという氣運がその前からあつたのですが、機が熟してきたというのか、帰朝して間もない私のところに、下出隼吉君が来て相談がもちかけられました。私は、日本社会学院が、非デモクラティックなものであるという事は知ってはいましたが、建部先生や米田先生の作られたものであるし、新しい学会を作ることによつて、それを潰すようなことになつては申しわけないと考えたので、二つを併立させることに苦心しました。日本社会学院は年に二回なり三回なり年報を出しているから、日本社会学会は月刊雑誌を出すゆき方でゆきましようということになつて始めました。当時私は、日本社会学院の理事のようなことをしていましたので、戸田のような奴は辞めさせてしまえというので、私はすっかり日本社会学院から離れてしまうことになり、お互いに勝手にやつてゆくことにしました。⁽¹⁶⁾

戸田貞三が「大正十三年五月日本社会学の創立」と記した同様に、高田保馬や松本潤一郎も大正十三年に日本社会学会が日本社会学院の事実上の後継者として成立したことを書き記している。⁽¹⁷⁾また、日本の社会学者や外国の学者によつて書かれた欧文の雑誌論文、パンフレット等ではこの点についてどのように記されてきたのであろうか。(二)

Matsumoto, "Soziologie in Japan," *Kölnner Vierteljahrshefte für Soziologie*, 1924, 289-291; (2) Teizo Toda, "Japan," in E. R. A. Seligman and A. Johnson, eds., *Encyclopedia of the Social Sciences*, vol. 1, 1930, 321-323; (3) J. E. Steiner, "The Development and Present Status of Sociology in Japanese Universities," *American Journal of Sociology*, vol. xlii, No. 6, May 1936, 707-723; (4) Howard Becker, "Sociology in Japan," *American Sociological Review*, 1, June 1936, 455-471; (5) Japan Sociological society, ed., *Sociology: past and present in Japan*, 1937; (6) E. Eubank, "Sociology, past and present, in Japan," *Sociology and Social Research*, 22, March-April, 1938, 347-356; (7) 「アメリカ社会学会のメッセージ」『社会学評論』一巻、一九五〇年、二三五—二三六頁 (8) Kunio Odaka, "Japanese Sociology: past and present," *Social Forces*, vol. 28, No. 4, 1950, 400-409; (9) J. F. Stein and Kenneth K. Morioka, "Present Trends in Japanese Sociology," *Sociology and Social Research*, Nov.-Dec., 1956, 87-96; (10) Kunio Odaka, "Sociology in Japan: Accommodation of Western Orientation," H. Becker and A. Boskoff, eds., *Modern Sociological Theory*, The Dryden Press, 1957, 711-736; (11) Akio Baba, "The History of Sociology in Japan," *The Sociological Review: Monograph*, No. 10 (Japanese Sociological Studies), Sept., 1966, 7-13, などを挙げる「ついでに」の「これらの中で」(1) (4) (6) (11)では日本社会学会の創立や創立時期については言及されていない。だが、日本社会学会創立について触れており、その創立時期を一九二三年(大正十二年)の創立としている論文は⑧ K. Odaka の「メッセージ」他⑨ Teizo Toda, ⑩ J. E. Steiner, ⑪ 「アメリカの社会学会のメッセージ」⑫ K. Odaka ⑬ J. F. Steiner and K. K. Morioka は、一九二四年(大正十三年)を創立として語るものである。

以上のように、現在の日本社会学会の出発点となっている「日本社会学会」の創立時期をめぐって、(i)大正十二年(大正十三年(五月))、というふたつの記述がなされているが、日本心理学会のように『日本心理学会五十年史』⁽¹⁸⁾(第一部)をもっていない日本社会学会に関してはいずれの記述が正確なものであろうか。社会学会創立の経緯なり経

過からすれば、おそらく、これらふたつの記述がそれぞれに適切なものかもしれない。設立経緯にそって考えるか、結果としての創立時期を考えるのか、の違いともいえる。大正十二年の創立とする林恵海は、『松本潤一郎 追憶』のなかの一文で次のように記している。「大正十一年末頃かと思うが、東京大学の社会学研究室の関係者が中心となつて、社会学研究の新態勢に應ずる新しい発表機関を設立しようとする気運が胎動してきた。私もその一員であったが、下出隼吉・藤原勘治・今井時郎・戸田貞三諸先生と共に、松本潤一郎先生もその斡旋につくされ、ようやく、大正十二年に、日本社会学会と名称して新学会が創立された。これが知られる如く、実に現今の『日本社会学会』の濫觴である。ところが、当時、建部先生が主宰されていた日本社会学院が、不振とはいえ、ともかく、なお、存在していたので、右の学院と相競争することは避けたいとの考えから、われわれの日本社会学会は月刊の社会学雑誌を発刊することをその主たる事業とした。そして、大正十三年五月から月刊の『社会学雑誌』を発行することとなった。」¹⁹⁾これに対して、大正十三年五月を日本社会学会創立とした戸田貞三の記述は、「日本社会学会の濫觴」の動きではなく、学会活動のひとつとして実質的活動が開始された『社会学雑誌』の創刊を以って、その創立とみていた。

『日本心理学会五十年史』をもつ日本心理学会も、「心理研究」(東京帝国大学)と「日本心理学雑誌」(京都帝国大学)とが合体して大正十五年四月に『心理学研究』が創刊され、その時を以って現今の日本心理学会の設立として『五十年史』が作成されている。「当時の日本心理学会は雑誌の編集だけをその事業としていた」が、その後大会開催をも事業に加えて第一回大会が昭和二年四月に東大法医学教室で開催され、次第に全国的な学会組織として確立されていった。²⁰⁾『日本社会学会』の創立も時期は二年程早くスタートしているが、「日本心理学会」の設立と似たような経過だったのではないかと考えられる。残念なことに林恵海が記した「日本社会学の濫觴」の具体的な経過を示す資料も持っていない。そして、創刊された『社会学雑誌』のなかでも、当時の日本社会学院との関係を配慮していたのか、「日本社会学会」創立の経緯や会則等についての言及資料も載せられていない。日本社会学会の第一回大会を報じて

いる当時の『帝国大学新聞』（大正十四年十一月二日付）には「公開講演と『階級』研究の発表、八日第一回の日本社会学会大会」という見出しのもとに次のように記されている。

全国官公私立各大学の社会学徒を網羅して日本社会学会は昨年五月の創立以来まだ日時浅いが『社会学雑誌』を刊行し又定期的に研究会を開催して研究と発表を続け名実共に日本社会学会を代表し新鋭なる学風を以て多士齋々として年来の研究が統出し益盛になっているが、来る八日（日）にいよいよ第一回年次大会を開催することになった（傍点筆者）。

戸田貞三が『社会学雑誌』が創刊された大正十三年五月を以って日本社会学会の創立としていたように、この『帝国大学新聞』（大正十四年十月二日付）に報じられていた「日本社会学会は昨年（大正十三年）五月の創立」という認識は當時一応の広がりのもとでもたれていたのではないだろうかと考える。そして、林惠海や戸田貞三の記述のなかでも、この社会学会創立の中心のひとりとして挙げられている下出隼吉（一八九七—一九三一年、明治三〇—昭和六年）の活動を記録した遺稿集では、その年譜に「大正十三年……日本社会学会創立。同学会常務委員（会計、庶務）に就任す。」と明確に記してある。その年譜から大正十二年、大正十三年のところだけを引用しておく。

大正十二年 二十七才

三月。東京帝国大学文学部社会学科を卒業す。卒業論文「消費の社会的妥当性研究と其基調」。

四月。同学部大学院に入学す。研究題目「消費の社会学的研究」。

四月。文学部副手を嘱託せらる。

七月。兵役、補充兵に編入せらる。

九月一日。関東大震災に遭遇、同夜半自宅全焼し家財一物を剩さず焼失し、多年努力蒐集せる参考書を失うも僅に父の銅像一基を背負い身を以て免る。

大正十三年 二十八才

当時社会学の研究は、大戦後の社会状況の気運に促されて、我国に於てもその勢たるや新々として鋭く勃興して来た。

然るに斯る時運に際して一方を顧ると社会学の方向を真に指導し又社会学研究の眞の基礎を興うべき權威ある學術団体が我が国に存在していない事はまことに我國の社会学界の爲めにも又我國の健全なる国民教化の上にも甚だ遺憾の至りであつた。君は此点に深く決意するところあつて、我國に於ても權威ある社会学の學術団体を創設し学界に貢献せん事を念願した。之が爲めに君は、一方身体上の固疾をも顧慮せず、東西奔走、大に献身、努力するところ甚だしきものがあつた。君が勤務する東大社会学研究室に於ても君と其意見の一致をみ、又同学の先輩諸賢も君に賛意し、遂に官公私立大学の社会学を中心とす學術団体「日本社会学会」の創立をみるに至つた。爾後数年間に亘つて、本学会の機関誌『社会学雑誌』の刊行並に研究会、大会等に関する庶務を執筆し、外に本学会の経済的援助を興える等一意専心に尽瘁す。本学会が今日の發展を見るに至つた其基礎は実に君の努力にまつところ甚だ多い。

四月。日本社会学会創立。同学会常務委員(會計、庶務)に就任す。
十月二十三日。長男幸雄君生る。

この「年譜」では、日本社会学会創立を大正十三年四月と記している。實質的な学会活動からすれば、大正十三年四月というのも間違いではないが、戸田貞三の記述、『帝国大学新聞』の記事、『社会学雑誌』の創刊月日等からすれば、やはり日本社会学会の創立を大正十三年五月とするのが適切なのではないかと考へる。日本社会学会創立を(i)大正十二年、あるいは(ii)大正十三年五月、のいずれに求めるにしろ、それを蔽密に明確にした資料をもち合わせていないともいえる。大正十三年五月の『社会学雑誌』の創刊に求めたとしても、創刊号の『雑誌』そのもののなかに新たに日本社会学会を設立した旨やその経緯、学会会則等がなにも記されていないのである。ここでは、限られた資料と先達の言及によるが、「日本社会学会」の創立を一応一九二四年(大正十三年)五月としてとらえておきたい。

東京帝大教授建部遯吾、米田庄太郎を中心に特に建部によって主宰され設立されてきた「日本社会学院」は現存し、その事務所は東京帝国大学文科大学(文学部)社会学研究室内におかれ、戸田貞三も幹事の一人であつた。『日本社会学院年報』(第一年—第十年)(大正三十一年)(編修員、建部遯吾、米田庄太郎)が刊行され、そして一時的に中絶の後に

『社会学研究』（日本社会学院年報第十一年第一巻一号―四号）（大正十四年四月―大正十五年八月）（編修員、高田保馬、赤神良護）が刊行されていたのである。建部遯吾は、文学部社会学の講座拡充問題（台田貞三のための助教授定員枠の増設）をめぐって大正十一年九月に辞職していたが、彼の影響力はまだまだ大きいものがあつたとも考えられる。だが、『日本社会学院規則』の「第一条 日本社会学院創立ノ目的ハ日本ニ於ケル社会学ノ研究ヲ奨メ業績ヲ顕スニ在リ、学院ノ事業トシテ年報ヲ発刊シ集会ヲ開催ス」、⁽²³⁾「第二条 創立者ヲ継統シテ経営一切ノ責ニ任スル者ヲ幹事会トス幹事会ハ自個補充ニ由リテ恒久ニ存立ス」、⁽²⁴⁾「第三条 年報ノ発刊ニ従事シ之ニ署名スルモノヲ編修員トス編修員ハ学院之ヲ推薦ス」の規約に象徴された「日本社会学院」の性格と運営、制約は、第一次世界大戦後の世界情勢や社会の新しい気運、問題関心、学問動向に充分に対応し切れない動きにあつたといえよう。特に下出隼吉らの若い学徒にとつては、ことのほか重くのし掛つていったとも考えられる。もちろん、「日本社会学会」の創設に導いた思想的基盤や背景がどれ程に確立されたものであり定着していたものであつたのかは定かではない。また、「日本社会学院」との拮抗関係のもとで「日本社会学会」が学術団体としては極めて不整備な形で、しかも財政的にも私的な援助に依存する形でスタートする羽目になつてしまつたことは記憶しておくべきであろう。三五才という短い命で学究生活を閉じることになつてしまつた下出隼吉を中心に、この「日本社会学会」の設立に加わつた若い社会学徒の当時の活動を顧みておくことも学史研究の重要な課題である。

(三) 下出隼吉（一八九七―一九三一年）の「社会的事業」と社会学史研究 当時の下出隼吉を始め若い社会学徒たちが『社会学研究の機関雑誌』の発刊や「日本社会学会」設立のために奔走している様子をもっともよく知ることが出来るのは、下出と大正十二年三月同期卒業の藤原勘治の「心友下出君」の追悼文である。⁽²⁴⁾それによると、当時社会学は新興科学として大学内外に異常な興味を引き起しており、当時卒業間際に下出を軸に「社会学研究の機関雑誌を作るうか」と話がもちあがり奔走したが、この計画は在学中にまともならず卒業後も有志で協議を重ねていたこと、そして、

「今私の記憶するところでは、下出君を筆頭に、大震災で不慮の死を遂げられた森重太郎、今講談社に居る吉田九郎君、暫く高野山大学に教鞭をとり今では郷里のお寺を継いで居る土肥義円君、当時文部省に居て後に大阪高等学校に転じた本田喜代治君、今岐阜高等農林に奉職している鈴木栄太郎君（大正十一年文学部倫理学科卒業後、三ヶ年間京大大学院で米田庄太郎、藤林健次郎両博士の指導を受けた。筆者、大学研究室の林恵海君、それに私などが、神田錦町の下出書店の二階で度々集ったものです」と回顧していたように、当時の若い社会学徒の気運が彷彿されていると共に、先述のように、やがて「日本社会学会」による『社会学雑誌』の創刊に結実していったのである。「日本社会学会編輯、『社会学雑誌』創刊号、大正十三年五月一日発行」（傍点筆者）を飾ったのは、戸田貞三・夫婦関係の強さ測定（離婚に関する一研究）、林恵海・ジムの社会学と社会心理学との関係、土方成美・経済社会と貨幣概念（上）、三田定則・自殺者に就いて、中山太郎・我国に於ける逆縁婚に就いて、松本潤一郎・仏蘭西社会学史一瞥（一）、三好豊太郎・不良少年の社会的考察、本田喜代治・オーギスト・コント、其時代及其思想、であった。

「日本社会学会」創立に大きくかわった下出隼吉は昭和六年五月に急逝するまでその後の学会活動に深くかわっていた。今井時郎は、やはり『下出隼吉遺稿』のなかで、下出と「日本社会学会」とのかかわりを「社会的事業」と名づけている。「それはいうまでもなく日本社会学会の事業であった。君の東大社会学科を卒業せられると間もなくから足掛六年行悩んでいた社会学会の歩みを何れだけ促し進めたことか。多くの費用を自己の計算で名状し難い種々の苦難と心労とを直接何等報いらるることなしに。私も其の間四年に亘り学会常務理事として君並に藤原君と会の中核的企画に事を共にし、隼吉君のお人柄と御努力には何れだけ推服していたことであつたか²⁵」。近代日本社会学史研究においては、先の「日本社会学会」創立時期の記述といい、下出隼吉のこのような「社会的事業」についても殆んど触れられることはなかった。

下出隼吉は、大学の卒業論文では（大正十二年三月卒業）生産に比して消費の研究は現代においては無視され放任さ

れているという問題意識から「……今日の社会状態にして合理的なる社会となさんとする以上、何を措いても先づ人類の物質的生活における消費の方面の研究を提唱せざるを得ないのである」として、「消費の社会的妥当性と其基調」と題する先駆的な論文を書いている。²⁶⁾ 短い生涯のうちに急逝してしまった下出は自らの著書はなかったが、「義理に關する一考察」(『東邦』第一号、大正十四年七月)、「明治社会学史資料(一)」(『社会学雑誌』第十八号、大正十四年十月)、「明治社会学史資料(二)」(『社会学雑誌』第二十三号、大正十五年三月)、「スペンサーと其学説」(『東邦』第二号、大正十四年十二月)、「自由民権論と其当時の社会学」(『新旧時代』第二年四・五冊、大正十五年八月)、「明治初期社会主義文献の二三に就いて」(『新旧時代』第三年六冊、昭和二年六月)、「明治初期の翻訳——社会と統計の訳出について——」(『東京帝国大学新聞』昭和二年六月二七日)、「水祝ひ考」(『社会学雑誌』第四十号、昭和二年八月)、「ミルとスペンサー 明治文化に及ぼした影響に就いて」(『経済往来』第二卷八号、昭和二年八月)、「日本の社会学とフューロサ」(『東京帝国大学新聞』昭和二年十月二四日)、「統計と云う言葉——本邦統計学史の第一頁——」(『統計集誌』第五五七号、昭和二年十二月)、「東大社会学研究室満二十五周年を迎えて」(『社会学雑誌』第四七号、昭和三年三月)、「明治初期政治論に及ぼしたる社会学の影響に就いて」(『東亜の光』第三卷五号、昭和三年五月)、「社会学の揺籃時代——当時の片山潜氏の傾向——」(『東京帝国大学新聞』昭和三年十月一日)、「進化論と社会解放運動」(明治文化全集附録「明治文化」第十五号、昭和四年二月)、「歴史的に觀たる本邦に於ける社会学と公民教育との關係」(『季刊社会学』第一輯、昭和六年四月)、「天賦人權説に關しての加藤、外山兩博士の論争に就いて」(未発表遺稿)などの論稿がある。²⁷⁾

更に、下出は明治文化研究会にも關係し、松島剛訳『社会平権論』、外山正一『民権弁惑』、中村敬太郎訳『自由之理』、加藤弘之『真政大意』、加藤弘之『国体新論』、「内地雜居論」(『内地雜居統論』)、「我国に於ける労働問題」(『東洋学芸雜誌抄』)などについての解題を『明治文化全集』に寄せている。加藤弘之『人權新説』の解題(未発表遺稿)、「自由民権文献年表」(『社会文献年表』)、「交通年表」なども作成している。²⁸⁾

下出隼吉の明治社会思想研究および社会学史研究は、総合され体系化されることなく未完のままに残されている。書誌学的なものでしかないという批判もなされ得ようが、彼の研究態度は豊富な資料蒐集と史実に基いて社会思想や社会学史の形成を跡づけとする着実な姿勢である。これは、思想史研究や学史研究のもっとも基礎的な要件であろう。われわれは、新しい社会思想や社会理論の導入・紹介に急なあまりに、これまでの学問的営みや苦闘の足跡を軽視しがちである。「併し乍ら其多くが、仮令翻訳、解説のしつ放しであり、無方向であらうとも、今日我日本に於いて、社会学研究の漸く盛んになれるは、之等の文献を発表せられし先輩諸士の努力にも負う所で、震災等により追々古い文献の失われゆく今日、私は之等の人々の社会的文献に限りのない愛着を覚ゆると共に、語学の発達の未だ充分でなく、研究設備の未だなく、其研究の困難なりし明治の初年、所謂新文化創盛期に於いて発表せられた社会学に関する文献資料が、其態様の現時に比して、甚しく稚拙であったと云へ、相当苦心せられた跡を見る時、是に敬意を表すると共に、私は今の内に之等文献資料を記録に留めて置きたいと思う⁽²⁹⁾」というのが、まずは下出の基本的態度であったと思う。どのような視点と思想的・理論的観点に立脚して、資料蒐集をなしそれらを考察していくのかという問題と同様に、学史研究における下出のこのような基本的態度も重視されるべきである。

また、本稿でとりあげた大正期における「日本社会学会」の設立をめぐる⁽³⁰⁾の関心についても同じであるが、われわれは先人の学史研究や研究業績、資料等を十分に活用していないのではないかとも思う。近代日本社会学の生成についても、まだまだ掘り下げて再考察してみるべき課題が残されていると考える。

三、「日本社会学会」の機関雑誌の変転、

研究報告会(社会学会大会)、「階級」論の特徴

前節でみたように、社会情勢と学問研究の新たな気運、若い学徒の情熱によって支えられ創立された「日本社会学

会」が歴史的な時代状況のもとでその後どのような軌跡を歩んでいったのかを検討することが、本稿でのもう一つの課題である。ここでは、ほぼ第二次世界大戦終戦までの歩みについて、(一)その機関雑誌の変転、(二)研究報告会一覧、(三)「階級」論の特徴、に限定して概観しておくにとどめたい。

(一)「日本社会学会」の機関雑誌の変転 「日本社会学会」編になる機関雑誌の移推をみるときに、その著しい変転に驚く程である。創立時の機関誌であった『社会学雑誌』(大正十三年五月―昭和五年九月)(全七七号)、『季刊社会学』(昭和六年四月―昭和七年七月)(全四輯)(四冊)(天地書房)、『年報社会学』(昭和八年十二月―昭和十八年七月)(全九輯)(岩波書店)、『社会学研究』(昭和十九年六月)(第一輯のみ刊行)(高山書院)と続き、終戦後は『社会学研究』(昭和二二年四月―昭和二三年十二月)(第一巻一―三集、第二巻二集、計四冊)(高山書院、国立書院)、そして今日の機関誌である『社会学評論』(昭和二五年七月―現在)(有斐閣)に連らなっている。終戦前には、学会の機関雑誌とは別に、社会学の専門的な雑誌として『社会学徒』(日本大学)(昭和二十九年)や田辺寿利・古野清人編『社会学』(二―五号、昭和七―八年)(森山書店)などが刊行されていた。

学術団体としての「日本社会学会」という組織上の枠組は維持されていたとしても、何故このように度重なる変転を余儀なくされたのか。『社会学雑誌』、『年報社会学』のように、比較的長く続いた場合もあったが、窮屈な出版事情や乏しい資金、戦時体制にますます組み入れられる状況のもとで、学術雑誌を刊行し続けることの困難さを如実に示しているともいえる。関係した先学達の苦心や努力は並大抵のものではなかっただろうと推察される。『社会学雑誌』の創刊号の「編輯後記」には「編輯は、かように苦しい役目であったけれども、兎に角、茲に新しい一つの雑誌が生れ出たところを見ては、言い知れぬ欲を感じています」と記してある。また『年報社会学』の「発刊の辞」(昭和八年十二月)にも、このことがよく表わされている。「ここに新しく始められるものは最早体裁のため權威のための、即ち機関誌のための機関誌ではない。いまや外、社会学はその危機或いは転向の機にあり、これと相伴って内、学会

は明るき白昼の光に向ってその窓を開け放たなければならぬ。然も学会機関誌を取巻くこの内外の情勢的变化は、事実同一の歴史的必然性のもとに立っている。歴史と人間のかかわり同様に、歴史的变化に学問活動をになう組織として懸命に対処しようとしていた姿がみえる。また他面では歴史の動きに対処し変転しつつ、既成事実の前に追隨し、翻弄されていく姿でもある。

機関雑誌の刊行形態にみるかぎりでのこのような変転は、「日本社会学会」の創立の経緯の特徴によっても、色濃く反映されていたのではなからうか。基盤や重心の定まらない、不安定な船出であったともいえる。春風を受けての船出であったとしても、定かでない航路と不確かな先導のもとでは、荒海に翻弄されていくしかなかったであろうか。創立時の創立趣旨や規約すらも明確な形で残されていないのである。若い学徒達による新たな学問活動の場を求めて「デモクラティックな学会を作ろうとする考え」が「日本社会学院」との拮抗のもとで、「日本社会学会」の組織や規約、財源基盤、運営にどのように生かされ、どのように具体的に実現されていたのであろうか。日本社会学会役員一覧などは掲載されているが、「会則」は『社会学雑誌』の時期には全くみられず定かでない。『年報社会学』の時期に「日本社会学会会則」がようやく載せられているが、学会運営の内容の、実態はよく分らない。

(二) 研究報告会（社会学会大会）第六〇回日本社会学会大会は、昭和六十二年十月二、三日に東京で日本大学において開催されたが、この現今の日本社会学会大会の出発点となった第一回大会は学会が創立された翌年の大正十四年十一月八日に開催された³⁰。確認できた範囲で第一回から第二十回までの開催期日、共通研究報告題目・テーマあるいは研究報告会構成、開催地・開催校などを列記しておくこと次の通りである。

- ・第一回研究報告会（社会学会大会、大正十四年十一月八日、「階級」、東京帝大。（松本潤一郎「現代に於ける階級の区画」、蔵内数太「階級概念に就いて」、公開講演会、穂積重遠「相続法改正の問題」、長谷川万次郎「闘争、闘争心及び闘争機関」、綿貫哲雄「維新前後の社会意識」）

- ・第二回、大正十五年十一月七日、「家族」、大阪毎日新聞。(新見吉治「日本家族制度の特質」、戸田貞三「夫婦結合分解の傾向について」。公開講演会、末川博「民法に反映したる社会問題」、永井享「国体觀念と社会」、今井時郎「文化の西遷北徙」)
- ・第三回、昭和二年十一月六日、「犯罪」、東京日々新聞社。(小野清一郎「刑事学の任務と方法」、本田喜代治「犯罪としての革命」。公開講演会(人口食糧問題)、守屋栄夫「海外移住について」、矢内原忠雄「人口食糧問題と社会制度」、佐伯矩「栄養と繁殖の關係」、戸田貞三「自然の人口と人工の人口」)
- ・第四回、昭和三年十一月三日、「方法論」(社会学研究法)、東京学士会館・東京日々新聞社。(秋葉隆「Intensive method について」、新明正道「方法としての社会学に就いて」、鈴木栄太郎「農村社会学研究法」、林恵海「社会学における社会と個人」、松本潤一郎「社会学における精神科学的方法」、綿貫哲雄「歴史法」、田辺寿利「デルケムに於ける社会形態学の觀念」。公開講演会(政党)、今井時郎「寡頭化か民衆化か」、永井享「既成政党と無産政党」、杉森孝次郎「政党の社会学的考察」)
- ・第五回、昭和四年、「都市」、名古屋。(磯村英一、三橋逢吉、井上吉次郎、今井登志喜、小川市太郎、弓家七郎、小野英雄、阿部重孝、藤田進一郎等によって、都市の歴史、都市の教育、都市の新聞、都市計画、都市の娯楽等についての報告。公開講演会、鈴木宗忠、藤井健次郎、高田保馬による講演)
- ・第六回、昭和五年、自由課題報告、東京帝大。(「……今回は一昨年名古屋市に於て開催したる第五回大会の決議に基き従来の慣行を破りて自由課題として諸講師は各自の専門的研究を發表した」。「かように回を重ねるに従って研究報告者が次第に多くなつて参りましたので、第六回以後は研究報告会の題目を一定せずに報告者の任意に委せたのであります。第六回は東京帝大で開かれたのであります。この時は報告会を一日として各大学又は専門学校等に於て社会学を講じていられる方々の研究報告を得たのであります。然るにこの方法が多数の共鳴を得たのでありましようか。第七回に研究報告すると予告せられた方が非常に多数になつたのであります」⁽³²⁾。
- ・第七回、昭和六年十月三十一日、十一月一日、自由課題報告、東京帝大。
- ・第八回、昭和八年五月六、七日、大阪市・関西大学。(原理論、特殊理論、歴史、政策の構成別研究報告) (研究報告者が増加して、内容別に分化させて構成していくことになつたと考えられる)
- ・第九回、昭和九年五月五、六日、宮城・東北帝大。(社会学方法論、社会学対象論、文化社会学、農村社会学、経済社会学、宗教社会学、人口論、階級論)

- ・第十回、昭和十年五月六、七日、京都帝大、同志社大学。(社会学基礎論、宗教社会学、集团社会学、都市社会学及び社会事業研究、文化社会学、人口問題及び農村社会学、社会意識の諸問題、家族研究)
- ・第十一回、昭和十一年五月十六、十七、十八日、早稲田大、慶應大。(社会学論、宗教社会学、社会調査・社会事業・社会政策、社会統制及び社会意識、家族、民族及び階級、都市社会学及び農村社会学、技術社会学・経済社会学・教育社会学、人口及び職業)
- ・第十二回、昭和十二年五月十五、十六、十七日、関西学院大、神戸商業大。
- ・第十三回、昭和十三年五月二九日、東京文理科大学。
- ・第十四回、昭和十四年七月八、九、十日、小樽高商、北海道帝大。(社会学論、社会意識、社会政策及び人口問題、宗教社会学、家族及び民族、国家及び経済、農村社会学、殖民社会学)
- ・臨時大会(紀元二六〇〇年記念臨時大会)、昭和十五年十月二六、二七日、東京帝大。(社会学基礎理論、宗教社会学、社会政策及び人口、社会統制および社会意識、家族・民族・国家、日本社会及び文化、農村及び都市、政治経済その他。公開講演会、建部遷吾「社会学講座の創設」、米田庄太郎「我国社会学者の今日の急務」、遠藤隆吉「社会学の学的及び社会的実相」、高田保馬「社会学原理」の前後)、戸田貞三「日本社会学会を中心に」)
- ・第十五回、昭和十五年十二月十七、十八日、台北帝大。(社会学論、家族・民族・農村、東亜社会及び文化、政治・国家。公開講演会、肥後和男「国史の発展と古代精神」、新明正道「東亜新秩序の進展」、杉森孝次郎「新東亜及び新世界秩序建設の理念」)
- ・第十六回、昭和十六年十月三十一日、十一月一、二日、九州帝大。
- ・第十七回、昭和十七年十月三〇、三十一日、東京商科大学、神田如水会館。(社会学原論、家族・民族、農村都市、社会意識、宗教道德、人口職業、政治経済、特別報告討論会(東亜諸民族の性格、中村良之助「アジア大陸の地勢の民族、秋葉隆「オロチオン族の社会と文化」、井出季和太「民族としての華僑」、宇野円空「スマトラの母権的社会」)
- ・第十八回、昭和十八年十月九、十日、京城帝大。(社会学原論、家族・民族、農村都市、宗教道德、政治経済。公開講演会、藏内数太「文化の東洋的概念」、新明正道「ファシズムと伊太利の崩壊」、戸田貞三「我国の軍事救護」。南方問題特別報告会、尾高邦雄「海南島の黎族に就いて」、泉靖一「西部ニューギニア踏査報告」)

- ・第十九回、昭和二年五月二六、二七日、「日本社会の封建性」、東京帝大。(尾高邦雄(道德)、桜井庄太郎(政治)、小口偉一(宗教)、橋浦泰雄(家族)、有賀喜左衛門(農村)、松島静雄(勞働)の報告)
- ・第二十回、昭和二年十月二五、二六日、東京大学。(自由テーマによる研究発表、新制社会科に関する特別研究報告。特別講演、Hebert Passin「輿論調査に於ける社会心理的諸次元」、John C. Paine「アメリカに於ける応用人類学」、吳文藻「戦時に於ける中国社会学の発展」)

このような学会による研究報告会(社会学会大会)の足跡をみるときに、先にみた機関雑誌の幾多の変転にもかかわらず、殆んど毎年にならわって営々と研究活動を継続していったことを知ることができる。昭和十九年から昭和二〇年度にかけてはついに戦時と終戦時の混乱とさまざまな困難のために一時的に中断されたとしても、学術団体、組織としてもツェネルギーをみる思いもする。そして、第一回大会が研究報告課題を「階級」を選んだように、当初は共通テーマを中心に研究報告会が開催されていたのが、やがて自由報告となり、まもなく個別のテーマ・部会ごとに構成され、ますます学問活動が特殊化・専門分化されていく動きがよく示されている。当初はさまざまな領域からの研究者も、研究報告会、公開講演会に参画し関係していたように思われる。現在の日本社会学会はおびただしくますます個別専門化(内部増殖化)し、同時に社会学全体としてはむしろ閉鎖化のきらいがないでもない動向に照せば、「日本社会学会」がしばしば公開講演会を試みていたことは興味深いところである。

しかし、この足跡は、社会学が社会現象に深くかかわる学問の特徴と制約からして社会の諸変化にさまざまな対応せざるを得ないにもかかわらず、国家体制の歩み、その体制的枠組・準拠枠組の動きと共に、「日本社会学会」が団体としては歩をともし半ば没入していったことをも示している。個々人にとってはいくつもの対応があり得たとしても、団体・組織としての学会は軍国主義体制のもとにおけるさまざまな弾圧や困難の前に、次第次第にそのような枠組を受け入れる形で運営されていく結果になっていったところが大きいのではなからうか。研究報告のテーマ別構

成のしかた、公開講演会のテーマと内容等にもそのことが反映されている。個々人の知的定点が揺れ動き特定の個人への「転向」や「右傾化」が個々に問題にされるだけでなく、それらを支え位置づける「全体」的な枠組自体が激しく揺れ動き、漂流し「転向」していったのである。まさに、相対性の原理は社会的空間においても作用しているといえる。台北帝大や京城帝大における学会の開催という事実も、当時の帝国主義的拡大のもとにおける植民地統治という歴史的事実の枠のもとで学会活動が展開されていたことを如実に示していた。

(三)「階級」論の特徴 ここでは、「日本社会学会」の設立以後にたどった足跡のひとつの特徴として、「階級」論をとりあげてみたい。⁽³⁴⁾学会として先ず最初の仕事として月刊雑誌を発行し、次に是非研究報告会を開かなければならないとして、大正十四年に第一回の研究報告会が開始されたことは、先に記した通りである。穂積重遠、綿貫哲雄、長谷川如是閑による公開講演会のあとに、第一回研究報告会が「階級」を研究題目として開催されたのであった。⁽³⁵⁾蔵内数太「階級概念に就いて」、松本潤一郎「現代に於ける階級的区画」の研究報告であり、当時の記録によると「……いよいよ研究題目『階級』の報告に移り、蔵内数太学士、松本潤一郎教授の順序にて、何れも一時間に亘って深遠なる研究結果を発表せらる。」「午後 八時四十分、戸田理事司会の下に質疑に入り、司城工学士、若宮卯之助氏、小林教授等と研究報告者との間に質問応答あつて後、議事に入る」⁽³⁶⁾とある。

この「階級」論を第一回大会の研究報告題目をとりあげた背景には、すでに明治三〇年前後からの労働問題への関心、特に大正期に入ってから労働運動の高揚、ロシア革命、マルクス主義の影響、労働者階級の生活問題、労働者や民衆の相対的な生活水準の上昇、中等階級問題、商工階層の営業税反対運動、河上肇などの「貧乏物語」等における啓蒙などがあつたと考えられる。当時すでに社会学界では、日本社会学院調査部調査（現代社会問題研究第二〇巻）『階級問題』（冬夏社、大正九年）（米田庄太郎「序論」、松本潤一郎「本論」執筆）、米田庄太郎「現代智識階級運動と成金とデモクラシー」（大正八年八月）、『現代社会問題の社会学的考察』（大正十年）、尼子止編『最近社会学の進歩』（大正九

年、や高田保馬『社会と国家』（大正十一年）『社会学概論』（大正十一年）『階級及第三史観』（大正十四年六月）、『階級考』（大正十四年十月）、などが出版されて「階級」論がそれなりに中心的なテーマのひとつになっていたとはいえず、「日本社会学会」の最初の大会で「階級」を研究報告題目としてとりあげたことは注目される。この第一回大会での蔵内、松本の研究は、他の人々による論文と一緒に、『社会学雑誌』（第二号、大正十五年一月）の特集「社会階級号」に収録されている。

現代に於ける階級的区画……………

松本潤一郎

階級概念に就いて（特にその本質的屬性たる力に就き）……………

蔵内数太

日本古代の社会階級……………

三浦周行

階級の内婚制に就いて（上）……………

戸田貞三

（資料）マックス・アドラー「階級とは何か」（平野義太郎）……………

（紹介批評）ブハリン「史的唯物論」（服部之総）……………

△平野義太郎「法律に於ける階級闘争」（円地与四郎）……………

△松岡静雄「太平洋

民族誌」（内藤吉之助）……………

三浦周行や戸田貞三などの歴史研究や実証的な研究も収録されていたこと、服部之総がブハリン『史的唯物論』の紹介批評をしていたことは興味深いが、松本潤一郎の論文はマルクス、テンニス、パレート、クーリなどにもとづく単なる概念上の紹介、整理にとどまるものであり、また蔵内数太の論文ではこの時点でM・ヴェーバーの支配論がとりあげられていたり鋭い洞察を示していたが、やはり概念的構成をこえるものではなかった。しかも、「日本社会学会」のその後の機関誌や大会の研究報告会のテーマ構成等をみると、「階級」論が表立ってとりあげられることは急速に消えていっている。

第九回大会（昭和九年）ではテーマ構成として「階級」論（このときには松本潤一郎「階級の制度観に就いて」、黒川純一「階級の集団的特質」という二名の報告がなされている）がおかれていたが、以後は第十一回大会（昭和十一年）に「民族及び

「階級」が設けられたのみであった(このときには七報告のうち、階級論については安西文夫「階級社会学の根本問題」という一報告だけであった)。先に列記した大会のテーマ別構成をみると次第に「家族及び民族」、「植民社会学」、「家族・民族・国家」、「東亜社会及び文化」などに問題関心が向けられていった動きを知ることができる。機関雑誌のなかでも山口正「日傭労働者問題に就て一考察」(『社会学雑誌』九号、大正十四年一月)、山口正太郎「社会階級の本質」(『社会学雑誌』十号、大正十四年二月)、戸田貞三「社会的地位決定要素としての称号資格」(『社会政策時報』八三号、昭和二年)、中野清一「民族と階級」(『年報社会学』第五輯、昭和十二年)などもあるが、次第に陰をうすくしていった。むしろ、「階級」論から「民族」論(Nation, Volk)への著しい傾斜がわが国においても推し進められていった。「民族」の要求は基本的であり、階級の要求は派生的である」とする潮流は、ひとり日本に限らず、戦時体制のもとで民族主義運動がますます高揚され、学問活動においても「民族」論が強められていった。当時の社会学界を代表する学者達の、高田保馬『貧者必勝』(昭和九年)、東亜民族論『(昭和十四年)、民族論』(昭和一七年)、新明正道『東亜協同体の理想』(昭和十四年)、『人種と社会』(昭和十五年)、『民族社会学の構想』(昭和十七年)、加田哲二『人種・民族・戦争』(昭和十三年)、『戦争本質論』(昭和十七年)、岡村重夫『戦争社会学研究』(昭和十八年)などはそうした動向の具体例であった。

われわれは、現在、階級・階層論、社会成層論という問題関心と研究領域をもっているが、「日本社会学会」の足跡とならんで、この「階級」論から「民族」論へと択一的で排他的な形で閉塞していった動きをいま一度再検討することは重要な課題である。今日、われわれの前に渦巻く社会的不平等、ジェンダー、エスニック関係等の構造と変動についての問題関心をより鮮明にしていくうえでも、この問題の歴史的再考察は必要であらう。(1)「階級」論から「民族」論への傾斜あるいは閉塞は、学問をとりまく民族主義運動や戦争体制下という外在的制約が重く作用していることは否定し得ない。しかし、学問活動としての社会学そのものの動向、ここでは、特に「階級」論の展開を担った人々の「階級」論そのものの内在的な特徴にもあったのではないか、と考える。(2)「民族」論や国家有機体論、国

家主義の議論は、昭和期に入って突如として出てきたというよりも、明治後半期以来から続けられていたものであることにも注目しておかなければならないだろう。(3)「日本社会学会」の設立とその後の経緯にも明らかなように、学会という組織・団体・制度化が、数多くの秀れた研究成果を刺激し生み出すとともに、個々人の学問活動を制約し方向づけていった側面にも眼を向けなければならないだろう。(4)新しい学問動向や論壇動向の紹介や既成事実の追隨にのみ走るのではなく、批判的な科学としての自律化の重要性とその難しさをここにあらためて銘記すべきであろう。(1)「階級」論そのものの内在的な特徴については、ここではいくつかの問題点を指摘しておくにとどめなければならぬが、(i)少くとも社会学における階級論の系譜については、諸系譜として高田保馬の階級論(社会的勢力論)、松本潤一郎、藏内数太などの階級論、米田庄太郎、山口正、戸田貞三などの諸研究、服部之総の「社会階級論」⁽³⁷⁾などに連なる諸研究などをきちんと再掘し整理し直すことが必要であろう。(ii)「身分」と「階級」、「党派」を軸にしたM・ヴェーバーの歴史社会的な関心にもとづく社会層論が戦前・戦中期、そして今日までどのように受容され研究されてきたのか、を再考察してみる必要がある。(iii)更に、「階級」論の展開が当時蓄積されつつあった統計調査、労働調査、社会調査などの経験的実証的な調査や歴史資料等とどのようにかかわり、相互媒介されたものであったのか、を検討しなければならないだろう。(iv)社会現象は同時に歴史的現象であるとすれば、「階級」「身分」現象も近代日本の歴史の展開として歴史的に考察しなければならず、当然のことながら歴史学、法制史研究、民俗学等とのかかわりがどのようなものであったのか、ということも重要な関心である。自ら外に閉ざした学問体系は、自己喪失の体系と同様に、歴史的洞察力と社会的創造力を失うことになる。

四、むすび

以上、本稿では、学問活動の組織化、制度化の動きとしての「日本社会学会」の設立とその後の経緯に焦点をあてて論じてきた。「はじめに」のところで触れたように、社会学史研究の基本的な論点のなからこの学問活動の組織化、制度化という論点を選んだのは、従来わが国社会学史研究でこの問題がとりあげられてこなかったからにほかならない。

「日本社会学会」の設立とその後の経緯について、ここでは、その創立の経緯や時期、当時の下出隼吉や藤原勘治らの若い社会学徒群像の活躍、そして「学会」のその後の経緯として機関雑誌の変転、研究報告会の動き、更にそこでの「階級」論の特徴について概観したにすぎない。こうした問題に関心を寄せる研究が、他の人々によって今後なされていくことも大いに期待したい。「階級」論から「民族」論への動きについては、わたし自身の研究課題として課されるものであり他日を期したい。

学史研究も疑問をもって再考察してみようとすると、きわめて時間のかかる作業であると思う。しかし、時間的にも空間的にもさまざまな意味で複眼的なもののみようとするときには、避けられない作業とも考える。学史研究のうえでも興味深い研究対象である故新明正道は「日本社会学史学会の出版にあたって」という短い文章のなかで次のように述べている。⁽³⁸⁾

「私たちが日本人として日本のなかに生活し、そのなかで社会学の研究に従事している以上、これはむしろ当然すぎることであって、私たちは何といってもまず日本社会学の学史的 연구に力を傾注しなければならぬはずである。」

「……この意味で私たちは私たちの学史的 연구の範囲を日本社会学だけに限らないで、欧米の社会学をもこれに含め、さらに必要な場合にはこのほかの国々の社会学の歴史も研究してゆきたいと思っている。」

「しかし、学史研究の焦点をどこにおくにせよ、学史的研究をおこなうにあたって、私たちの銘記すべきことは、学史的研究を単なる学史的研究として機械的に孤立させることなく、これを不断に社会学研究そのものと結びつけ、学史的研究をもって究極においては社会学研究を推進するテコたらしめてゆくことである。」

われわれは、広がりゆく社会的的世界と新たな知的地平のもとで、日本社会学史研究の重要性と可能性とを考えてみなければならぬであろう。

(1) 本稿は、「日本社会学会」の設立と「階級」論と題して、一九八七年六月二日の神戸大学での日本社会学史学会、一九八七年十月二日の日本社会学会で研究報告した内容を原稿に書き直したものである。本稿を書くにいたった直接の契機は、わたし自身が関心を寄せている社会成層論、階級・階層論について近代日本どのように展開されてきたのかをもう一度調べ直しておきたいという発想と、更に先に共訳した(S. P. Schat, *Empirical Social Research in Weimar-Germany, 1972*) (川合・大淵監訳)『ドイツ・ワイマール期の社会調査』(慶應通信、一九八七年)で当時の雑誌文献等に丹念にあたって検討していく試み、とに刺激されてである。

(2) 「日本社会学史学会」の設立総会は、新明正道、藏内教太、武田良三、馬場明男、早瀬利雄、大道安次郎の発起人のもとに立教大学で昭和三十五年十月三十日に開かれて設立された。「社会学史研究」会報第一号、一九六一年、第二号、一九六二年を参照。従来の社会学史研究としては、大道安次郎『日本社会学の形成』、ミネルヴァ書房、一九六八年、河村望『日本社会学史研究(上・下)』、人間の科学社、一九七五年、秋元律郎『日本社会学史—形成過程と思想構造—』早稲田大学出版部、一九七九年、斎藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版、一九七六年、斎藤正二『社会学史講義』新評論、一九七七年、高橋徹『近代日本の社会意識』新曜社、一九八七年、新明正道『社会学史概説』岩波全書、一九五四年)一九七七年、横山寧夫『増補 社会学史概説』慶應通信、一九八一年、横山『社会学理論と社会思想』慶應通信、一九八四年、阿閉吉男・内藤莞爾編『社会学史概論』勁草書房、一九五七年、蟻山政道『日本における近代政治学の発達』実業之日本社、一九四九年、庄司興吉『現代日本社会科学史序説』法政大学出版局、一九七五年、石田雄『日本の社会科学』東京大学出版会、一九八四年。

(3) ささまざまな社会思想・社会学説・社会学理論・社会学理論の展開として歴史的に跡づけられ再考察されるが、その時代時代の中心的・支配的なパラダイムやモデルに焦点が当てられて、それらの周辺のなスペースタイプやモデルをも浮き彫りにし関連づけられることは少ない。中心的なもの、と周辺のなものとの相互関連的な歴史的展開をみていかないと、学史研究として

は極めて一面的な考察になりかねない。

(4) 大道安次郎『日本社会学の形成』(前出)では、帆足万里、西周、加藤弘之、外山正一、建部遯吾、遠藤隆吉、米田庄太郎、戸田貞三、高田保馬がとりあげられていて興味深い。建部遯吾の社会学については多くの学史研究のなかでは、明治三〇年代から大正期前半までの社会学とされているが、彼の生涯、生活史をみると、東大辞職後のその後の昭和期においても依然として政治、研究、教育、著作等において活躍し続けている。

(5) 日本の社会学者による試みは乏しいとしても、次のような外国の学者の研究を挙げることができよう。S. N. Eisenstadt with M. Czelaru, *The Form of Sociology: Paradigms and Crises*, John Wiley & Sons, 1976, A. Oberschall, ed., *The Establishment of Empirical Sociology: studies in continuity, discontinuity, and institutionalization*, Harper & Row, Publishers, 1972, Martin Bulmer, ed., *Essays on the History of British Sociological Research*, Cambridge Univ. Press, 1985. わが国でも「国家学会」や「社会政策学会」についての研究はいくつかなされてきた。石田雄『日本の社会科学』(前出)参照。また、「日本心理学会」については日本心理学会編『日本心理学会五十年史(第一部)』金子書房、昭和五五年、がある。

(6) 「日本の主要学協会一覧」『世界大百科辞典』(第六巻)、平凡社、一九七二年、一七頁。

(7) のちに検討するように、「日本社会学会」の創立時期については(i)一九二三年(大正十二年)、(ii)一九二四年(大正十三年)という二つの記述が従来なされてきたが、ここでは一九二四年(大正十三年)とするのが適切であろうという考えに立っている。

(8) 林恵海「日本社会学の発展」、日本社会学会編『教養講座・社会学』所収、有斐閣、昭和三十六年、三二九—三三〇頁。

(9) 『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』、昭和二十九年、四三—四四頁。

(10) 『日本社会民俗辞典』第二巻、誠文堂新光社、昭和二十九年十二月、五八五—五六頁。

(11) 福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』有斐閣、昭和三十三年、六九九—七〇〇頁。

(12) 『講座社会学・別巻』(東京大学出版会、一九五八年、一九六五年)の巻末の「年表」に、やはり「一九二三年(大正十二年)」、日本社会学会創立」とある。

(13) 河村望「日本社会学史研究(下)」(前出)、三三九頁、秋元律郎「日本社会学史」(前出)、二四三頁、福武直「日本社会学」阿閉吉男・内藤莞爾編『社会学史概論』所収(前出)、四三〇頁、北川隆吉監修『現代社会学辞典』有信堂、一九八四年、六七六頁、など。

- (14) 戸田貞三「弔辞、下出隼吉君」『下出隼吉遺稿』昭和七年四月、七四八―九頁。
- (15) 戸田貞三「日本社会学会を中心として」『年報社会学』第八輯、昭和十六年、六六頁。
- (16) 戸田貞三「学究生活の思い出」『思想』三五三号、一九五三年十一月、九四―九五頁。戸田は、アメリカ・イギリス・ドイツ等での海外留学から大正十二年九月に帰国。
- (17) 高田保馬「日本に於ける社会学の発達」岩波講座「教育学」第一八冊所収、昭和八年、一四頁、松本潤一郎「日本社会学」時潮社、昭和十二年、七二頁、また、新明正道編著『社会学辞典』河出書房・昭和一九年、の「社会学年表」(一一四頁)でも「日本社会学院の後身として日本社会学会成立され、その機関誌として『社会学雑誌』創刊さる」とある。
- (18) 日本心理学会編『日本心理学会五十年史(第一部)』金子書房、昭和五五年。
- (19) 林惠海「日本社会学会の育成の親」松本達治編『松本潤一郎 追憶』昭和二八年、二二―二三頁。他方、戸田貞三「下出隼吉君の思い出」によると、『社会学雑誌』を月刊雑誌として発刊することがまとなり、「……大正十二年九月に月刊の第一号を出すこととして原稿も集まり、既に之を印刷にかけて居たのである。然るに此計画は大震災の下に打破せられ、多くの同僚の稿と共に小生等のそれも失われてしまった」とある。『下出隼吉遺稿』(前出)、七八四頁。
- (20) 日本心理学会編『日本心理学会五十年史(第一部)』(前出)、三一―三五頁。
- (21) 『帝国大学新聞』(大正十四年十一月二日付)。更に、大正十四年十一月十六日付『帝国大学新聞』では、「新鋭の学風に激洩奔放の論陣、盛會裡に終った日本社会学会大会」という見出しで、日本社会学会第一回年次大会が同月八日に東京帝大法学部第三十番教室で開催され、穂積重遠、綿貫哲雄、長谷川万次郎の講演があり、更に夕刻より工学部地下室食堂において研究テーマ「階級」について、蔵内数太、松本潤一郎の研究報告がおこなわれたと報じている。
- (22) 『下出隼吉遺稿』(前出)、七三二―二頁。下出は、明治三十年二月十四日愛知県熱田町に出生、昭和六年五月十五日急逝。この「下出隼吉之年譜」は、その年譜の末尾に「林惠海編す」とある(七三八頁)。大正十三年「四月日本社会学会創立」とあるのが、何故四月なのかよく分からない。『社会学雑誌』(創刊号)の奥付には「大正十三年四月二八日印刷納本、大正十三年五月一日発行」とある。
- (23) 戸田貞三「学究生活の思い出」(前出)によると、「事件の内容というのは、私が間もなく帰国するについて、建部先生は予め私のために文学部の助教の席を設けて置こうとされたところ、当時は定員が一杯で文学部当局がそれを承知しなかったのに対し、先生は、では俺がやめれば一つの席があくだろうというので、強いて辞められてしまった」(九二頁)。
- (24) 藤原勘治「心友下出君」『下出隼吉遺稿』(前出)所収。藤原は、下出と同期の卒業であり卒業論文は「新聞に就いて」で

ある。『社会学雑誌』の編輯にも深くかわかり、『社会学雑誌』にも「新聞紙研究の一指向」（第四〇号、昭和二年八月）、「報導されたる事実」（第四九号、昭和三年五月）などの論文も書いている。

(25) 今井時郎「隼吉君の横顔」『下出隼吉遺稿』（前出）、七五三—四頁。

(26) 下出隼吉「消費の社会的妥当性と其基調」『下出隼吉遺稿』（前出）所収、一一一—一六七頁。

(27) これらの論稿は全て『下出隼吉遺稿』に収録されている。

(28) 『下出隼吉遺稿』（前出）、下出隼吉「明治社会思想研究」浅野書店、昭和七年、に収録。

(29) 下出「明治社会学史資料（一）」『下出隼吉遺稿』（前出）、一七三—一四頁。

(30) 戸田貞三「日本社会学会を中心として」（前出）、六七頁。

(31) 『季刊社会学』第一輯、昭和六年四月、一七—四頁。

(32) 戸田貞三「日本社会学会を中心として」（前出）、七〇頁。

(33) これらの研究報告会については、『社会学雑誌』、『季刊社会学』、『年報社会学』、『社会学研究』、そして戸田貞三「日本社会学会を中心として」（前出論文）を参照した。尚、「日本社会学大会プログラム（戦前）」『社会学評論』一一〇号、一九七七年、

一九〇—二〇九頁をも参照のこと。

(34) 特に社会学界を中心とした戦前の「階級」論の再検討は、重要なテーマであり、他の機会に稿をあらためてもう少し具体的に展開するつもりである。

(35) この第一回研究報告会の様子については、『社会学雑誌』第二〇号、大正十四年十二月、に詳しく記されている。

(36) 同雑誌、九三頁。

(37) 服部之総「村落結合と離村現象」（大正十四年卒論）『服部之総全集』第一巻、福村出版、所収。服部「社会階級論」『社会問題講座』所収、新潮社、大正十五年。

(38) 新明正道「日本社会学史学会の出版にあたって」『社会学史研究』（会報第一号）、一九六一年、一一—三頁。